

小田原史談

第 138 号

発行所 小田原史談会
小田原市本町1-6-20

北村透谷記念碑建立の経緯

透谷記念碑建立の経緯について、『湘南伊豆文学散歩』（野田宇太郎）には、福田正夫らの『民衆』詩社が中心で、大正時代から透谷の記念碑を建てようという話も生れていた。それが具体化したのは、昭和時代に入ってからだ。

と、記されている。

この説明によれば、記念碑建立は『民衆』同人が中心となり他の人もかかわった、と受取れる。

確かに『民衆』同人たちは、透谷の記念碑を建てたいという希望を持っていたのは事実で、『民衆』北村透谷特集号（大正七年五月号）には、その旨記されているのが散見される。

しかし、記念碑建立の中心となるのは、『民衆』の同人ではない。

当初、記念碑建立の許可が当局より下りそうもない

状況になったとき、その行き詰りを打開するため、島崎藤村に当局へ提出の上申書を書いて貰おうと動いたのは、尾崎亮司氏と西村隆一さんの二人で、西村さんは、尾崎氏に従って、藤村を東京麻布の自宅に訪問している。

西村さんが藤村の「上申書」の原稿を所蔵されているのも、そのためである。

このことについて、前述の『湘南伊豆文学散歩』には、西村さんが『民衆』の同人であると書かれているが、それは正しくない。

『民衆』の同人が中心となって碑を建立したとするのが、文章上格好よかったからかも知れない。

この大久保神社（小田原市城山）での、除幕式当日の写真は、そのことを物語る一つの資料でもある。

『民衆』同人の福田正夫と

窪（小田原市城山二丁目）に競馬場開設に奔走するなど、地域振興に意を致しており、そのため、結構身銭を切ったようだ。

透谷記念碑建立に当っては、単に金を出しただけではなく、福田や牧ら『民衆』同人に呼びかけたこと、記念碑建立の発起人の一人で小田原保勝会員であった西村隆一さんは言われる。

福田正夫も、東京で奉賀帳を廻したが、集金のための費用がかかり過ぎて、何も拠出できなかったようだ。

その後福田は、記念碑が出来上

ると、除幕式を盛大に行なおうと、ポスターの原案、馬場孤蝶や牧野信一の講演、透谷の詩・俳句のピアノ伴奏による独唱、福田蘭童に奏による独奏、筆曲合奏などの盛山なプランを西村さんに送ってきているが、勿論、プランだけに終わった。実施するだけの資金がなく

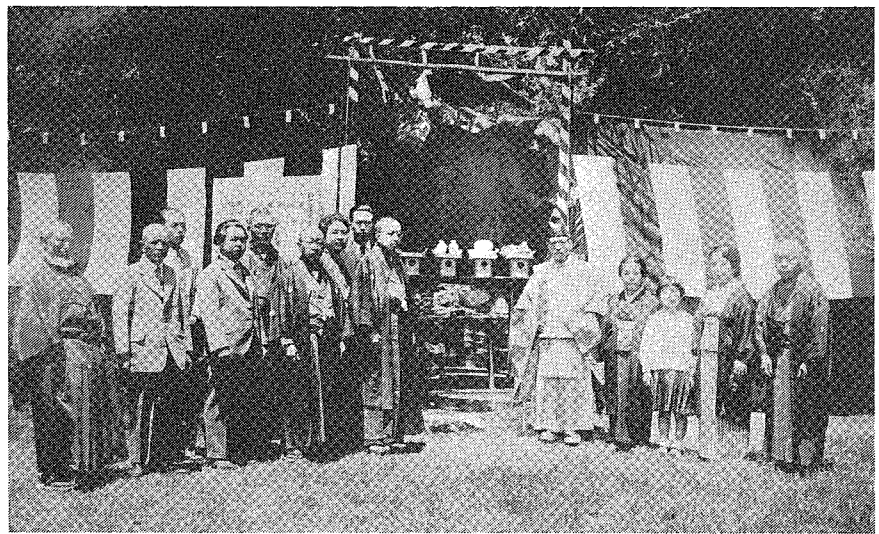
碑を立てるに精一杯であった。そこには、福田正夫の楽天的な性格の一面を垣間見るような気がする。

除幕式が行われたのは、昭和八年六月十四日のこと、碑が建立された同四年七月から四年の歳月を経て

いがある。

その理由は、記す迄もないが未曾有の大恐慌に見舞われ、その後、ようやく不景気のドン底から抜け出したものの、募金はままならず、満州事変以来次第に戦時色を強めてゆく時勢に、除幕式は簡素にならざるを得なかった。

（岡部忠夫）



北村透谷記念碑除幕式記念写真 昭和8年6月14日

明治以後小田原劇場物語(四)

石井富之助

内容
一 劇場附寄席(一三五号〜一三七号)
二 映画館

- 1 電気館
 - 2 有楽館
 - 3 大正館
 - 4 富貴座(以上本号)
 - 5 復興館
 - 6 娯楽館
 - 7 東宝館
 - 8 戦後の映画館
- 三 演劇雑記 (以下次号)

二、映画館

映画館については安藤正作氏の「小田原映画五十年史」が唯一の資料として残されている。これを軸とし、それにわたしの見聞を加えて記述を進めることとする。

小田原で活動写真すなわち映画が始めて紹介されたのは明治三十五年、豊田亭においてであった。活動写真が日本に輸入されたのが明治二十九年。大坂で始めて公開されたのが明治三十年はじめのことであり、東京では明治三十二年六月、歌舞伎座において上映されたのが始めであるから、小田原の町民は比較的に早い時期に活動写真を見る機会にめぐまれたということが出来る。その後、富貴座で時々活動写真の興行が行なわれているが、常設館としては電気館が最初の

ものであった。

1 電気館

電気館は明治四十五年三月、幸三丁目(茶畑)に建設された。館主は倉田熊次郎で、入場料は十銭、特約は福宝堂、第一回の番組は新派悲劇「秋の声」と「明烏夢泡雪」、小柳ホース、宮古文男などの弁士が声色で説明した。当時わたしは小学校にも上っていない頃であったが、父につれられて観に行った。一場面終るごとに拆が入って暗くなり、次の場面が現われるという風で、弁士も前記二人のほかには苗字は忘れたがピリケンというのや女の弁士もいて総勢五人ぐらいだったように覚えている。

安藤氏はここで上映された主な映画を次のごとく挙げている。山崎長之輔、久保田清主演の不如帰、探偵劇野路の駒、

音岩、嫁が淵、畜生腹、琵琶歌、相思の曲、白き梗、金色夜叉、木やり唄、松風村雨、時雨日記、乳姉妹、月魂、潮、乃木大将一代記、新牡丹燈籠、芦が池。俠艶録。旧劇では番町新血屋敷、朝顔日記、金森大助、白波五人男、宇都宮釣天井、曾我物語、河内山宗俊、白石嘶、高田の馬場、相馬大作、忠臣蔵

この電気館は、大正二年、本町に有楽館が建設されることになり、これに買収されて大正二年十二月閉館した。この間一年十か月、上映回数八十七回であった。

2 有楽館

有楽館は大正二年に幸三丁目(本町)現在のオリオン座のところに建設され、十二月十八日開館した。小峯徳次郎、広沢利三郎、板東米次郎等の合資によって出来たもので、定員八百名の洋館二階建、外観内容ともに当時の地方活動常設館として最高を行くものであった。

日活特約でスタートを切ったので、旧劇は尾上松之助オンリー、新派はいわゆる向島物(当時日活の新派の撮影所は東京の向島にあった)で、関根達彦、立花貞二郎、土方勝三郎、大村健等の悲劇活劇であった。翌大正三年十二月からは、天

然色活動写真株式会社すなわち天活と特約し、旧劇では市川延十郎、沢村四郎五郎一座、新派は中野信近一座その他のものを上映した。

当時は日本物と西洋物とが併映されていたが、西洋物には次のようなものがあった。

- 地下室、伯林の秘密、怪鳥
- 白墨、白対黒、名馬、ウラルの鬼、新十字軍、天馬、黒俱樂部、交戦国、迷宮、愛国の血、黒十字組、エス

二号、愛の復活、怪自動車、雄飛、妖鬼、死の騎手、軍旗等、また連続活劇に黒い箱、拳骨

越えて大正五年からは天活より分れた小林喜三郎の小林商会の直営館となり、旧劇は市川海老十郎、市川介十郎、新派は中野信近、月岡一樹、桂寿郎、小

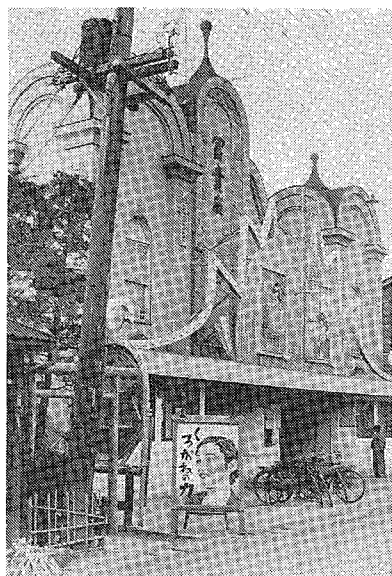
堀誠、井上正夫、木下吉之助などの出演のものが上映され、西洋物ではカピリア、ポーリン、獣魂、マクベス、女ローリーなどがあった。

また大正六年十月には館名を吾妻座と改め、再び日活直営となつて石井常吉支配人の経営するところとなつたが、大正大震災の厄に遭つて後はついに復興されなかった。

3 大正館

有楽館の建設に先だつ大正二年六月十五日には、緑二丁目(竹の花)に大正館が開館した。久野の北村好兵衛経営で、小松商会と特約して、優秀映画を上映した。小田原町の北部住民ならびに隣接の足柄村その他農家地域の観客を吸収しようとしたのであろうが、地の利を得ず、不入続きで経営難におちいり、

富貴座(昭和15年) 小田原図書館蔵





小田原市浜町山王神社に奉納の
大海嘯記録画

一時休場し、大正四年一月、日活直営として復活したものの、これまた成績が思わしくなく、一か年ほどで閉館してしまっただけで、上映写真の主なもの。
己が罪、想夫恋、水戸黄門
記、弘法大次郎、花川戸助
六、舞扇、堀部安兵衛、女
飛行家、伏見の大戦争、火

明治の大海嘯

石井福太郎

明治三十五年九月に入ってから四日の午後から激浪が始まり、六日の晩まで海岸を荒したが、五日が特に甚しく、この日家屋の半潰十戸破壊四戸、浸水百戸、軽傷者数名の被害を出した。その後波浪は一進一退をくりかえして、九月二十八日に至った。この日、早朝より雨風で、午前八時頃から一時強雨となったが、

中の女。

日活直営となって後、忠弥と正雪、野狐三次、九尾の狐、加賀見山お初一代記、尾張国丸、塩原多助、金森家七変化、夕立勘五郎、天狗廻状、三日月次郎吉、拳骨和尚、大塩平八郎等、尾上松之助・美川延一郎主

演のもの。
4 富貴座
活動写真の流行につれて大正初年には劇場の活動常設館に転向するものが続出した。劇場として永い歴史を持つ富貴座も大正四年二月に日活直営の常設館となった。
旧劇に相変らず尾上松之助一

派、新派は従来の立花貞二郎一派に山本嘉一、藤野秀夫、東猛夫、衣笠貞之助等が加入したものであった。何という題名の写真であったか忘れたが、わたしは衣笠貞之助の御目見得の写真を観ている。ヒロインは勿論立花貞二郎で、衣笠は、女賊の役で出演、写真の始めにボンネットをかぶった洋装の衣笠が御挨拶をする場面があったのを覚えている。当時、洋装というのも珍しかったし、観客の方に向って帽子をかぶったままお辞儀をしたのが、当時小学生だったわたしの頭に妙に印象的に残っている。 上映写真は

水巾着、祖國、軍使、ファントマ、ハートの3、ガレルハマ、赤輪
このように日活の写真を上映してきたが、大正十年頃から当時隆盛におもむいた松竹映画と特約を結び、諸口十九、岩田祐吉、栗島すみ子、川田芳子、五月信子主演のいわゆる蒲田映画 祇園夜話、暮れゆく駅路、船頭小唄、水藻の花、ひかれゆく日、妖女の舞、噫森 訓導、地蔵物語、大東京の 丑満時

十時頃になって雨は小降りになり、午後には快晴になる見込の空模様になったのに、雨とともに高まりつつあった波浪の震動は増々加わって十一時頃になると、にわかに数丈の大激浪と化して陸地に押し寄せた。浪は防波堤を越え、そのしぶきは海岸老松の先端に及んでいたという。海嘯の暴威は午前十一時から午後一時までの二時間であったが、小田原を初め、沿岸一町十二村に亘って被害は死者六十七、重軽傷者二六四とある。(『小田原市史料』)

以上述べたのは小田原中心であるが、当時小田原には北条時代に城下を圍繞する大外郭の一環として、早川口から山王川河口に至るまでの海岸に堅固な土塁が築かれていた。然るに酒匂村(山王原、網一色、酒匂、小八幡の四ヶ村)には防波堤は無かった。防波堤のあった小田原でさえ死者十二名も出している。防波堤の無かった四ヶ村の惨事

石井さんは竹見龍雄さんの義理の弟で、山王神社の著書があります(昭和五十一年)。これはその中から再録させて戴きました。昭和六十三年死去 冥福を祈ります(和田登 記)

この「碑文谷美談」は当時新聞などでも報道されて世人を感動させた碑文谷踏切の踏切番の殉職物語で、山本嘉一、藤野秀夫主演のものであるが、その最初の字幕で「碑文谷美談」という字にかぶさるように桜の花が咲いて、それがハラハラと線路の上に乗る、それをわたしは今でもはっきり記憶している。それが字幕に絵を配合した最初のものであったからである。
また西洋物では
天馬、プロテア、イタリイ
シネマ会社のアントニーとクレオパトラ、宮殿の怪火、

大正・昭和と、 著名な文人と交遊のあった 小田原御幸浜・養生館主

西村隆一氏に聞く(一)

明治以来、多くの文人に親しまれてきた、小田原の著名な旅館養生館が老朽化で昨年三月取壊され姿を消すに当り、多くの新聞やテレビで取り上げられ、話題を呼んだことは、本誌一二三号で紹介したが、当主の西村隆一さんは、若き日文学青年で、文芸雑誌の発行や童謡の作詞をしており、また、北村透谷顕彰碑建設や、小田原城跡埋立反対運動の発起人として活躍、それに、白秋が仲人親でもあり、いろいろな話題を持っておられる。

養生館のこと

――養生館が開業されたのはいつ頃のことでしょうか。
「私の親爺がねえ、養生館を開業したのは、明治三十六年七月です。最初は滄浪閣の建物を利用した訳です。」



西村隆一氏(昭和六十三年三月)

その前の年の三十五年に小田原に大海嘯がありました。滄浪閣の東側に鷗盟館がありました。が、鷗盟館は海岸と高さが同じようなものでしたから流れちゃいました。滄浪閣は残りませんでした。滄浪閣には要路の方がいらっしやいますね。その方がお泊りになるのが鷗盟館で、伊藤(博文)さんと連絡をとる場所でもあった訳です。滄浪閣の下は、地下室になっていまし

たが、大海嘯のため、塩水がいっぱい溜っていたのを覚えていません。

どういう訳ですかね、滄浪閣は、山角町にありました足柄病院の管理になっていました。わたしんところでは、小田原は非常に気候がよいということ、東京からやって来まして、初め滄浪閣を借りたんです。借りた家賃の領収書があります。

三十七年に、鷗盟館のあった土地と、滄浪閣との間の土地を買い取りまして、波が危いというので石垣を築いた訳で、そこへ新築して養生館を移したので

養生館の東隣りが野村さんという子爵の別荘で、西隣りが滄浪閣。さらにその向うが空地で大蓮寺のところまで空いていました。その先に寺田(台助)さんの家があって、さらに先に藤館がありました。これは料亭旅館でした。それから海岸になってしましまして、ほんとにいくつも家がなかったですね。

この一帯は風致区域になっていまして、そういう関係で家も建てられなかったです。その時は、持っておられた皆さんの生活は豊かだった関係もありましょう。大きな地所を持っていたも、それを手放しせずといった訳です。

それでねえ、今の私の家の隣

りと滄浪閣の土地は、今人手に渡っていますが、その一部を日本橋の加藤さんというお医者さんが持っていた。ところが時分の鼻先が人の地所では、と、これを是非売ってくれという訳で、私の親爺はそう言われて、売ったんですよ。それで私のところは、現在の土地だけになったんですが、加藤さんは、その土地を売って、また、二代、三代と持主が変りゃたんです。

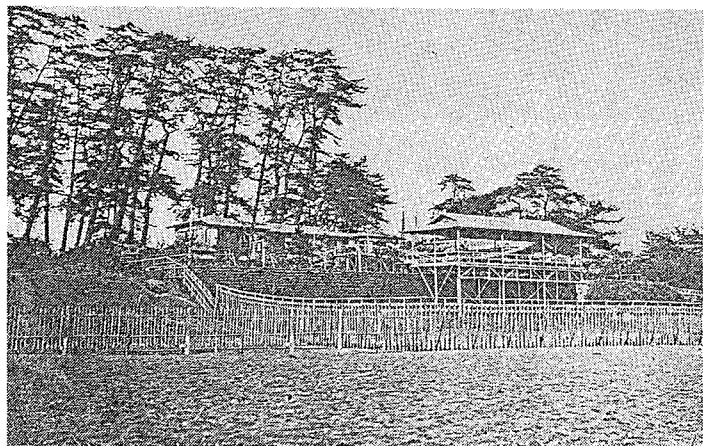
これが昔の写真です。当時、海岸はずうっと松並木でした。――どこの写真屋で撮られましたか? 「五十嵐かも知れませんがね。あとは大概自分で撮っているんです」

――カメラは何を使われましたか? 「親爺が私が小田原中学校に入ったお祝いに買ってくれました。大きさは名刺板でフィルムは今のようなものではなく、ガラス板です。湿板というやつです。現像も自分でやっています、

今その種板は残っていますよ。……」

「ところで、これは養生館を開業するときの案内で親爺が書いたんです」

「拝見すると、単に養生館の開業案内だけにとどまらない。文章は、今でこそ古めかしい表現となっているが、土地っ子には特に意識されていなかったと、考えられる保養地として恵まれた小田原の環境を列挙しており、また、宿の施設、衛生、その



養生館

山奥郡長良に於て戦死す。
 年三十九。
 元治 乱を避けて江州に走り
 日野城主蒲生賢秀・同氏
 郷に仕う。没年不詳

松波庄九郎が主命により西村氏を継いだのは、大永四年(二五二四)、長泰の孫正秀が没し、その子秀成がまだ幼かったため庄九郎のちに西村氏を去った

無二の友

小暮君を悼む

相澤 栄一

七十六年の長い歲月、兄弟のように結ばれた絆が断たれて、小暮君、貴方は帰らぬ旅路を歩まれて行かれた。諸行無常、悼まじさに、私の貴方へのお別れの言葉が涙声となつてしまつたのでした。大正元年でした、御幸ヶ浜辺と松林を隔てた、時宗、福田寺にあった、私立、小田原幼稚園の庭で、貴方と共に打寄せる波や、そよぐ松風を聞きながら遊び戯れました。その頃貴方の家は幸町の国道筋から宮小路に通ずる路地にあつて、明神さんの北東辺りだつた。尋常高等小田原第一小学校への入学も

一緒でした。間も無く国道筋から割屋敷に曲る角から三軒目で、瀬戸辨護士宅と小説家、北原武夫さんの実家である、北原医院との間の二階家に越されました。貴方の家の裏庭が当時、近所の子供達の遊場になつていて、一丁目の角の高井さん、北原武夫さん、商工会議所の前会頭の今井さん兄弟達も仲間でした。貴方が五年生の頃、割屋敷の製水会社隣の千坪以上あつた広い邸宅に移られました。庭にはドイト鯉が泳いで居る池もあつて、貴方と共に私も広い庭を飛び回って遊びました。私も随分お世話

になつた。前橋の老舗の旅館のご実家だと言う、貴方のお母さんは慈母のような柔和な人でした。今も私の目に面影が浮かんでくる。私よりはるか成績の優秀な貴方だったが、小田原中学への入学も私同様、高等科一年生からでした。灼熱の御幸ヶ浜辺での海水浴、酒匂や早川の川での鮎釣り、前の第二小学校庭のテニス、コートでのテニス、等貴方と過した中学時代の懐かしい思い出が次々と私の脳裡に浮んで来る。日本の米穀取引業界の王者と謳われた、貴方のお父さんは、常に再起への執念を燃やして居つた故か、勝負に総てを投じて悔いなかった。中学三年生の春の頃、貴方は割屋敷の広い邸宅から十字町の山下別荘の中にあつた家に引越された。大震災後の残暑の熱い日、当時としては珍しい、イーストマン社の小形カメラを持つた、貴方

という。
 正秀が没したとき、その子秀成は満五、六歳の計算になる。ところが、庄九郎は、油商人から美濃守護土岐氏の執権長井長弘に仕えるに當つて、「長井家の家老西村家が断絶したので西村勘九郎に改めた」(『日本歴史大辞典』)、「長弘の家臣西村氏の遺蹟をついで西村勘九郎正利を名乗つた」(『国史大辞

典』)とあり、西村氏の記録とは、若干の食い違いがある。また、面辞典には、西村勘九郎正利を名乗つた時期については觸れていない。分からはぬからであろうか？
 その点、司馬遼太郎氏は『国盗り物語』を執筆するに當つて、道三の資料を調査されているが「道三について書かれたものは割合重複しますが、まとめてしま

えば、新聞記事で三十行ぐらいしかない。つまり来歴がはっきりしない人物だということ

川柳
 高井喜雄
 あの人も年金ぐらしか小公園
 表札が變つてご近所事情知り
 神様を置くには惜しい地価となり
 仏さんみな甘党の彼岸寺
 マツタケのことに触れずにキノコ飯

らなかつた。前橋の老舗の旅館のご実家だと言う、貴方のお母さんは慈母のような柔和な人でした。今も私の目に面影が浮かんでくる。私よりはるか成績の優秀な貴方だったが、小田原中学への入学も私同様、高等科一年生からでした。灼熱の御幸ヶ浜辺での海水浴、酒匂や早川の川での鮎釣り、前の第二小学校庭のテニス、コートでのテニス、等貴方と過した中学時代の懐かしい思い出が次々と私の脳裡に浮んで来る。日本の米穀取引業界の王者と謳われた、貴方のお父さんは、常に再起への執念を燃やして居つた故か、勝負に総てを投じて悔いなかった。中学三年生の春の頃、貴方は割屋敷の広い邸宅から十字町の山下別荘の中にあつた家に引越された。大震災後の残暑の熱い日、当時としては珍しい、イーストマン社の小形カメラを持つた、貴方

「ところで、祖父のことでは、いろいろな本が出てますが、こんな本が……。明治維新に日本の軍靴をこしらえたんです。今、横浜に記念碑が立っているらしい」
 勝三の伝記は『西村勝三遺傳』と題して、大正十年 西村勝三伝記編纂委員会から刊行されているが、昭和四十三年にも『西村勝三の生涯』と題して刊行されているようだ。
 彼は、天保七年(一八三六)十一月九日、佐倉藩(十萬石)の支藩佐野藩(一万六千石現在の栃木県佐野市)の江戸丸の内藩邸で、藩の村家老西村芳郁の三男として生れた(続) 聞き手 岡部忠夫

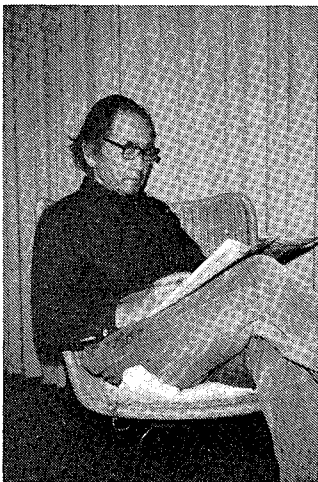
と共に、焦土と化した国道筋の幸町、万年町から全壊、半壊の家並の新宿、山王、網一色、を通過して、コンクリートの橋桁の折れた酒匂橋まで歩きました。貴方は各所の震災風景にカメラを向けていた。

大震災後、貴方の一家が東京に引揚げられたので、貴方は一ヶ月程、私の家から共に中学へ通ったのでした。其頃、貴方は城址の緑滴る桜並木や、幸町の町並や、御幸ヶ浜辺の絵を何枚も画いた。貴方の画才は非凡だった。又音楽への意欲も強かった。貴方が私の家に居る頃、貴方のお父さんは貴方がいとおしかったのでせう。何回も私の家にみえられた。冬は川獺の毛皮を襟につけたオーバーを着て、鋭い眼に剛気を漂わせていたが優しい語り口と物腰で私の両親と話していた。私は貴方が美校に進み画家になる事を期待して居ましたが、東京高等工芸の木材工芸

科に入学された。東京に行かれてからは貴方も苦勞をされたらしい。卒業後、仙台の工業試験場に勤め、後、弘前の工業学校の教師になったのでした。

数年して貴方は郷里、小田原に帰り、県の工芸指導所に入所して永田所長の下で地場産業である、箱根物産の近代化のために情熱を傾けたのでした。幼稚園の園児の頃から貴方との気の合った付き合いが、青年期になって、人生や社会に対する考へ方が期せずして同一となっていた。会うと二人の話は何時でも社会批評めいたものになるのでした。私も当時、零細な木工業をいたして居ったので、貴方の指導を受け斬新なデザインの木工芸品の商品化に励んだのでした。貴方の純な無頓着さは幼少年期の、おおらかな育ちの故だったでせう。貴方は戦前戦後の激動の中を常に澄んだ目で現実を見つめながら生きて来た。

ありし日の小暮次郎氏



ヒューマニストでもあり、反骨精神の実践者でもあった。貴方の生き方は当時の役人の世界と半ば無縁だった、戦後の矛盾混乱した動きの中で貴方

は新しい道を歩んだ。身軽になって絵画芸術の創作活動に専念したのでした。貴方は変わり行く小田原の街を見つめながら、追憶の糸をたぐって、大正期の美しい海辺の風景を、城下町の町並を、又忘れる事の出来ない大地震の猛威を、優れた描写

郷愁をよぶ小暮次郎さんの画文集

『小田原古きよき頃』刊行される

このほど、小暮次郎さんが遺された画が『小田原古きよき頃』として刊行された。

四六判変型、角背金箔押し、クロス張り装丁の豪華本で、内容は、「第一章古きよき頃」「第二章チンチン電車の思い出」「三章国府津から湯本まで」「三章私の見た関東大震災の記録」で構成されている。

小暮さんにとっては、大正期が幼稚園、小学校、旧制中学校と、一番感受性の強い幼少年期から青年期に合致している。

小暮さんの絵は、ライフワークとして、昭和五十年代に始めた、大正時代の小田原の姿を8ミリ映画として映像化に用いるワンカットの風景描写のために、一般の画家の描くのと異なる

た、小暮調とでも言うべき独特の色調と画質を持っている。しかし、単なる懐古趣味でなく、そこから抜け出して、大正時代の画像を留めようとする姿勢に貫かれ、単なる心象による絵ではなく、多くの古老の証言を求め、また、写真、絵葉書などを参考として、丹念な考証を重ねた上の作品である。空間のある、のびやかな、そして当時の人達のいきづかいを伝えて充分なものがある。その情景を知らぬ年代の者にもノスタルジアを感じさせるのは不思議だ。やがて、その8ミリ用のワンカットは、一つの絵として、文章を伴い、『神奈川新聞』に小田原の今昔を三十三回も連載された。小暮さんの文は、趣きを

持っており、時に面白味を醸し出す内容ともなっている。

小暮さんの画文集は、この他『広報おだわら』その他に連載したので、関係者の話によると企画から発行迄の三年がかりのことだ。

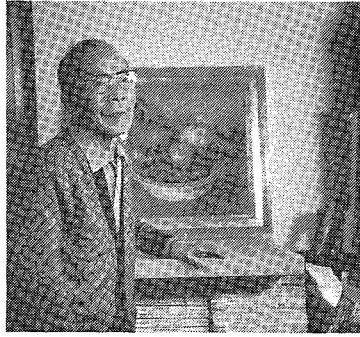
小暮さんは、体調を崩して病床にあっても、絵の印刷の色が気に入らないと、気が済むまで直させたという。最後まで、なし遂げなければならぬという気迫に満ちていたに違いない。印刷完了は生涯を閉じられたときである。その仮とじの本は、小暮さんの胸にだかれた。(南里 哲)

なお、本書の企画刊行に、文化堂印刷株式会社以下社員数名と伊勢治書店大嶋事務が加わった。

略 歴

明治四十年八月四日小田原に生まれる。小田原中学校へ(現小田高)を経て東京高等工芸学校(現千葉大)を卒業。仙台工業試験所、県立弘前工業学校、小田原中学校、神奈川県工芸指導所に勤務。その間、友人と共に自作の木工芸品の発表会を、また、弦楽四重奏団を結成、音楽会を開催。第二次大戦後、工芸研究のかたわら城東高校、大磯ステーパー学園、大同学院の美術の講師を勤める。一九七〇年代後半より「大正時代の小田原」の8ミリ映画製作をライフワークとし、作品に「関東大震災・「人車と軽便鉄道」、「三保ダム」・「千度小路」(未完)などがある。これらの作品は、乞われるまに、市内公民館、老人会、小学校などで映写し、懇談を重ねる。晩年の八十七年代より健康を害しつつも、神奈川新聞に『スケッチで綴る小田原今昔』、市広報に『小田原のスケッチ今昔』などを執筆。本年一月、市立病院に入院中、画文集『小田原古きよき頃』が仮とじまで完成したが、七月三日他界。享年八十一歳。

力を駆使して、巧みな造形と、リアルな色調で、重厚な水彩画として見事に形象化してくれたのでした。貴方の描いた風景には、風俗や時代を語る人間が登場する。町並には其処に生る人々が、海辺を生活の場として働く人々の姿が、教会で異国の宗教への信仰に生る群像が、克明に描かれて、人間の哀歎を謳いあげている。そして画同様に大正期の美しい風景や風俗を、リアルな術のない文章で語って貰っている。小田原の大正期の庶民の生活文化史の絵画的形象化とも言える貴方のユニークな画と文集が貴方の入院中文化堂印刷の荻野社長の御協力によって出版が



小田原画壇の恩人
湯川先生のこと

兎 月 人

当時絵を描くことにうしろめたさを感じた。それは大人達が喰えないと云う前程のもとに真向から反対したからである。小田中で美術を教えていた湯川先生も、生徒にこんな様子が見えると首をかしげたものだ。私もその一人で四年の頃油絵をはじめたが、何かとまどうことが多かった。だが、私が絵画熱に浮されたのはそれ程偶発的なことではない。

私の家は東京で四代前からの商家だったが、父がかなりの趣味人で、書画などに凝っていたし、商売柄色々なものが家にあっ

たからでもある。ところが次々に結核にかかり、私が四歳の頃は祖母と二人だけになってしまった。私達は止むなく、書画骨董類と共に小田原へ転地したのは大正十二年の五月のことであった。天神山は、箱根と相模湾を一望に見晴らし、ひ弱な私には、格好なところであったが、九月の大震災で再び出鼻をくじかれたが、丁度その頃、湯川先生も美校を経て洋画家第一線を抱き乍ら小田中に来られたと云う。隣りは箱根登山の技師の家、震災

急がれて居ったのでしたが、残念ながら間に合はなかった。だが文化堂さんの御好意で仮綴とは言へ完成された本となって告別の日貴方の胸に抱かれる事が出来何よりでした。盆の十五日、貴方のお宅に伺った時奥さんが文化堂印刷の社長さんが今届けてくれたと言って、見事に出来上がった本を見せてくれました。貴方の好きな淡い色調の布袋で、格調の高い本でした。私はその本の頁を捲りながら「よく、こ

後このあたりは閑院邸をはじめ、別荘の廃墟で、遊び廻わる私が立寄る先はこのお隣しかなかった。小学校三年の頃か、八畳の長押に横長の絵があった。これが湯川先生との出合で、赴任間もなくここへ下宿されていたのである。家にある沢山の絵は殆ど日本画、祖母にしても洋画にはなじめなかったとみえる。さて、私は、昭和五年から小田中に通うことになるが、間もなく伊豆山に移り、先生も何処かえ移られ週に一度の授業でお逢いしたが、それは只先輩達が云う紳名の中の先生であった。「やまあらし」なんてこの名があるのか、御令嬢によると、オー

「千度小路」も又製作半ばとの事、悼しい限りです。貴方が芸術的意欲を滾らせて描いた、リズム絵画の典型のような、大正期の小田原を語る数々の画は、文化的遺産として郷里の人々に何時でも芸術的感動を与えてくれる事でせう。小暮君、貴方のお冥福を心から祈ります。



シンビジューム

湯川治郎 画

略 歴

明治二十八年九月二十一日広島県沼隈郡赤坂村(現福山市赤坂町)に生まれ。大正四年 東京美術学校西洋画科入学。大正九年 同校卒業。大正八年第一回帝國美術院展覧会に入選。

大正十二年五月(昭和二十七年五月)神奈川県立小田原中学校(小田原高校)に在職。西相美術協会々長、小田原市図書館協議会委員、小田原市文化財保護委員。平成元年五月二十日 他界、享年九十三歳。

豆山 伊斐 反射炉

真壁敏男画



江川太郎左衛門英龍が幕府に建議して、安政元年6月起工したが11月安政大地震、翌年英龍の病死などの困難を乗り越え、同5年完成。品川台場や各藩の大砲を製作した。国指定史跡(本年初詣で見学)

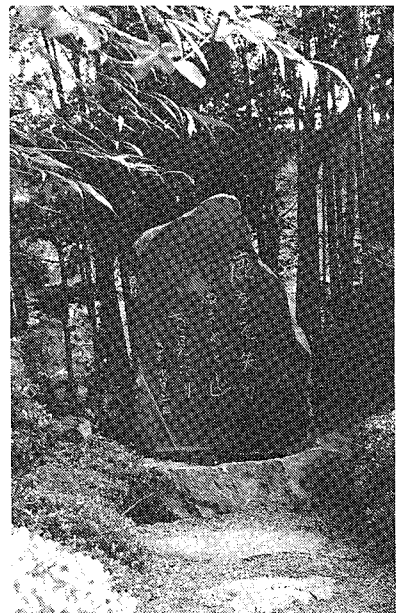
なめらかさが無いのが特長である。だが、たまに驚いたように大きな黒子の間から笑いかけるのがユーモラスで親しみを感じた。それは冴えたデッサン力に似て歯切れのよさでもあった。「先生は骨董に凝って絵を描かない」誰かが云う。当地の住み心地になじんだのか、一度帝展に出品されたきり中央にも郷里広島にもあまり行かれず、だが作風は少しも衰えなかった。先生の発足当時の日本洋画壇は激動の時代、アカデニズムから印象派を経てシュールに到るめまぐるしい様相であった。だが頑としてこれにわすらわされなかったのも一つの個性である。

昭和のはじめ先生は同志との地にグループを作られた。相州美術、今の西相美術協会の前身である。戦後は絵を描く人が多くなった。描くことが褒められるようになった。先生も風景画静物画を沢山描かれた。個展も開かれた。市民写生会その他で私もお供することが多くなった。「君は仕事が速いからね…」それだけ私の方が描き込みが足りないのかも知れない。そしてカライトタンが多くなったのを嘆かれる、相変らず真鶴がお好きだった。先生は明治中葉からの人生をどう考えておられたのか、俗に云うよき時代を懐かしむ一人に違いない、実に物知りである。人間の寂しさを物知ることによって耐えているよう

平成元年七月九日

(とげつじん 一陽会々員 西相美術協会々長)

にも見えた。三人のお子さんに恵まれてはいるが、奥さんは若くして亡くされている。偶然のことから先生とは縁があった。実は、この奥さんは私の小学校一年担任の娘さんだったし、東京高芸で絵を習った和田教授は先生の母校時代の同期生である。先生は齢九十三にして世を去られた。協会の初代会長を承らくお願いしたが、無言のよき美術指導者であり、特異な芸術家でもあった。



先般、久野の東泉院境内に写真のような文学碑が建った。揮毫は板橋在住の作家中河与一先生。碑面の語は漢籍の中から先生が撰んだもの。

鹿を見失ひぬ

されど山を見たり

人はみな目的を追って生きている。しかしその目的、理想、夢は往々にして実現しないこと

が多い。追っていた鹿は見失ってしまった。だが人は見失った其処に得難い山を見た。鹿を追っていた苦勞の連続の中で、人は鹿に優る得難い心の城を築いたのである。

九十二翁の中河先生はどんな山を見たのであろうか。

(高田掬泉)

御案内

第三十六回小田原市民文化祭の一環として『講演とシンポジウム』が次により開催されます。

日時 九月三十日(日) 午後一時〜五時

場所 小田原市民会館三階小ホール

特別講演

小田原北条の時代背景と戦

国女性たち

講師 作家 永井路子

シンポジウム

小田原北条氏百年の文化

II 隆盛期の文化を探る II

パネラー 静岡大教授小和田哲男 歴史研究家立木望隆 小田原市史編纂専門委員岩崎宗純

コーデネーター

小野意雄 倉持弥平

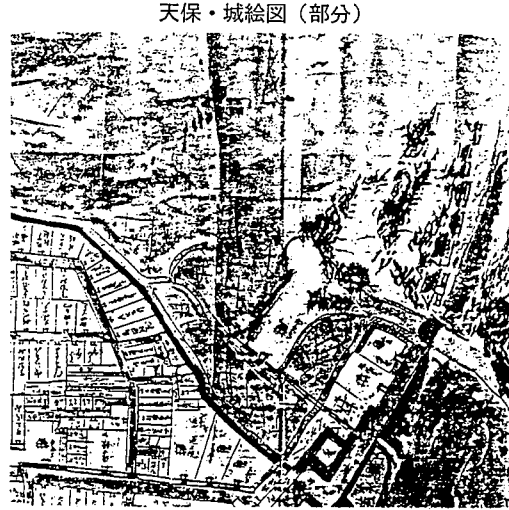
申込先 市教委社会教育課

小田原北条の時代背景と戦

幕末、中島・本久寺に 住持された成貞尼について(三)

小野意雄

(正面)
当山二十九世本堂庫裏再建中興
龍僞院日領聖人
中邨日本講寺二百二十六世
(右側面)
天保五甲午歳八月十九日寂



天保・城絵図(部分)

まず日本講寺ですが、この寺は法華宗正中山法華経寺支配で日本寺ともいわれ、千葉県香取郡多古町南中(旧南中町)にあり、中村檀林とも言われる学問寺です。本久寺の歴代住職も、この中村檀林出身者が多く、本久寺二十七日日観は日本講寺百十七世、二十八日久は百七十二世、三十一世日細は二百九十三世で、本久寺自身も学問寺の性格を持っていたのではないかと、推測させられます。

日領という法名の僧侶について、『日蓮宗寺院大観』(池上本門寺編)を資料とし、調べてみますと、次の二例が得られました。恐らくこの二例は、本久寺の日領の経歴の一端を示すものでしょう。

日本講寺 二百二十六世 日領(英鏡) 文政六(一八二三)年三月七日辞任
妙祐山宗林寺 十九世 日領 天保元(一八三〇)年三月十五日辞任

宗林寺は、江戸・上野の谷中にあり、本久寺と同じ京都・本国寺の末寺で、『江戸名所図会 下巻』に

「螢沢 谷中宗林寺の境内にあり……螢沢と唱う
すべて此辺螢の光り特に勝れたり 草の葉を
落るより 飛ぶほたる哉 芭蕉」
と、あります。

往時の文人墨客の交遊・往来が想像されます。また、明治時代には庭に萩を植え、通称「萩寺」で知られていました。そこで、日領の小田原・本久寺住職就任を、天保元年としてよいかどうかについてですが、次のような文書がありますから、これは断定してよいと思います。

小田原狂歌衆のリーダー紀軽人(大阪屋藤井甚兵衛)

ゆかりの藤井家文書のなかに、「帰山の挨拶」(差出人 龍藝院 三月十五日付)があります。「送僧帰山」という挨拶詩詞もあります。また、差出人が「貞庵」の書状二点があります。「染筆御札」(二十二日付)請取人小田原甚兵衛、「ヨキ細工の事」(二十九日付) 紀軽人宛の札状です。そして文面等から、貞庵は尼僧と思われ、照応関係が二重・三重に認められます。貞庵は成貞、帰山の僧は日領とみることができでしょう。墓碑銘でみるように、日領の院号は、龍僞(ゲイ)院ですから、狂歌仲間(紀ノ軽人)への手紙では、龍藝(ゲイ)院と署名したのでしょう。なお、軽人ゆかりの円福寺の住職に、龍藝院という僧侶はおりませんし、真言宗では、僧名にこうした院号は使わないということです。もっとも龍藝院という署名が、僧個人の院号なのか、それとも寺院名なのかは判りませんが、「日蓮宗寺院大観」でみるかぎり、龍藝院という寺院は見当りませんから、僧名とここでは、読みとってよいと思います。

一幹致啓伸候、時下春色相増候処御家内弥御揃可被成家務順然不斜存上候、次ニ当院長禪無事当月二日帰山候ニ付御安意被服下候、

隆貫寺儀道中至極達者同伴来ル四月三日頃より加行為始候積、此段御安神相願候、諦昶様之義何分御世話頼上候、御伺なく一通差上候間御序ニ御届罷下候様頼上候

先ハ取り急乱筆な如斯ニ御座候之外後便万方可申上候

三月十五日
龍藝院 頓首

同伴の僧の「隆貫寺」については、なんとも言えません。が、日領の後嗣三十世になった龍源院日領かも知れません。墓碑によれば、天保十一年九月四日寂ですが、彼は名古屋の連勝寺(京都・本国寺末 寺格紫)・新潟県上越市の常願寺(同本国寺末 寺格緋)・大阪府高槻市の本澄寺(同本国寺末 寺格緋)で嗣法をして後、日本講

三 本久寺の再建

1 日領の帰山と紀軽人

小田原市中島の本久寺、歴代住職の墓域の正面中央(成貞法尼の墓碑の左隣り)に、天保五(一八三六)年に寂した日領の墓碑があります。

成貞が、安政六(一八五九)年から二十有余年前に小田原に来住して、過去帖・歌碑や墓碑銘に刻まれているような事業をなしたとすると、二十有余年前に相当する天保の初めに寂した、この住職日領について調べてみる必要がありましよう。

彼の墓碑銘はつぎのようです。

寺の準歴を経て、本久寺に入っています。

また文中の「諸社様」ですが、読みを「テイショウ様」とし、成貞が「ショウテイ」と読まれることと、符合します。また、「テイアキ」と読むことにしますと、小田原藩の天保順席帳に「生涯之内年下被下 一 御給米四拾俵 貞明」と記載されている女人「貞明」のことが気になります。約十年後には、貞明に代って「弘化二(一八四五)巳年十二月極御暮方御土台中勘」に「金百四十兩三分二朱於錦様御賄料」と所載される「於錦様」がおります。が、「貞明」・「於錦様」と「成貞」の關係等については、別稿の課題としたいと思います。また、天保順席帳の寺院の項に、つぎのような記載があります。が、関連事項ではないでしょうか。

弟子取立候付被下

一 御扶持式人分 本久寺 (註)

丑十二月御取締に仰出候付此内三分一減弟子取立

候付御渡方相直り候迄被下

一 米三俵 同 寺

(註) 二宮尊徳全集第十四卷(四三頁)は「永久寺」としては、永久寺は本久寺の次行に記載されていますから、この寺は別の寺で、本久寺と推定してよいと思います。

こうして日頃の異動が、「帰山」ならば日頃は嘗て、文化十四(一八一七)年の山王原の火災により本久寺が災する前後に本久寺の僧であり、その後修行のために日本講寺・中村檀林に留學してのことになります。紀輕人との交際は、文化十四年の火災以前に小田原で既にあり、そして谷中の宗林寺時代と続いていたのでしよう。こうした日頃の結ぶ狂歌の縁の上に、成貞も加わり、その後、成貞の結ぶ和歌の縁の場・サロンが、展開したと、思われます。吉岡信之の「宗祇」の話の接点も、こうした結縁の庭にあることでしょう。

紀輕人が逝ったのは、文政十三年(一八三〇)年六月でした。日頃が小田原に戻って、三ヶ月もたない時で

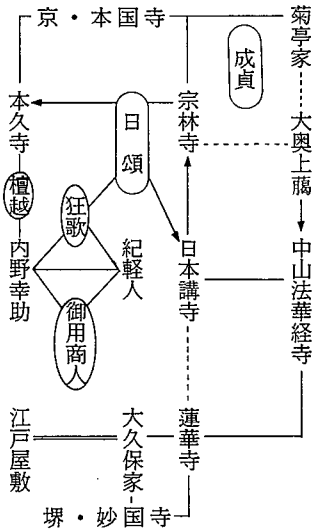
した。輕人の子花丸が、弘化三(一八四六)年に亡父輕人の十七回忌に際して、歌会を催します。この歌会の催主の一人に、室小路花守という女人がおります。この日の彼女の詠歌は、

書き捨てし 言の葉茂る 夏草の
露の玉ちる 涙 手向けん

室小路は、武者小路をもじっているとみてよいでしょう。「桜狩り」の詠歌のこともしるはれますが、本久寺の「旗桜」のゆかりとも、思われます。『新編相模風土記稿』に、「弁の中に、旗の形なすものあり故に名く、古木は圍三尺五寸、文化中災にかかり今蘇生す」とあります。風土記稿の原稿がまとまったのは、天保七年頃と言いますから、その約十年後の歌会ですから、成貞の花への愛情はひとしおのものがあることでしょう。

2 貞庵の構図

文化・文政期を京都に過した成貞は、狂歌仲間との交遊に乗って行ける女人だったでしょう。しかし狂歌が、成貞と日頃とを結んだということではないでしょう。成貞の事情が、日頃の帰山をうながしたのだと思います。ここには藩主忠真の意思が働いていると思います。それには忠真の意思が働く場の構図として、つぎのような關係が指摘出来るからです。



紀輕人の狂歌仲間(弟子)の一人に、油屋(内野)幸助がおります。二人は、姻戚關係にあり、内野家は大阪屋甚兵衛の斡旋と指導によって、質屋を開業出来たと言われています。両家とも小田原藩江戸屋敷に出入りの商人であり、しかも内野家は、本久寺の大檀越です。後に明治の中期に、焼失した妙見堂の再建に資財を投じます。ここに挙げた蓮華寺は、千代の蓮華寺で、中山法華經寺末ですが、上席二十五等の内に入り、小田原地方十八カ寺の触頭役寺となっていました。そして任職は、塚の妙國寺より入山し、この蓮華寺を経由して中山法華經寺の任職になる方が多く、いわゆるエリート・コースの寺でした。板橋の大久寺も一時、中山法華經寺末になったことがありました。ここに塚の妙國寺は、大久保家の菩提寺の一つであり、泰藤・泰綱・泰道・泰昌・昌忠の五代の墓があります。

こうした關係に加えて、中山法華經寺は各藩大名の尊信を集めており、とくに江戸城大奥の女中達の尊崇を強く得ていました。例えば天保の改革の対象になった智泉院、同院持八幡別当守玄院は、法華經寺の地内にありました。上野の谷中にある宗林寺は、京都の本國寺末という關係から、公家出身の上臈達と關係があるかも知れません。

小田原では、京・本國寺末の本久寺のほか、もう一カ寺ありました。板橋にあったのですが、明治十九年に二宮町袖ヶ浜に移転しております勝山妙安寺で、近衛家の墳墓三基があったことで知られ、近衛家墳墓も二宮に移転しております。成貞が、忠真と知己のある女人ならば、その他大久保家内庵など、貞庵を造営するに適當な寺は幾つかあったことでしょう。しかし先述した構図と、なによりも京・本國寺が菊亭家の菩提寺である關係で、本久寺に貞庵が営まれることになったのでしよう。

ここで特に「天保城絵図」について、触れておきたいと思えます。

成貞、日頃の本久寺再建と関連すると思われる資料の一つとして、板倉文書「小田原城絵図」を見逃させません。

この城絵図は、天保の初期に描かれたものとされてい
ます。総じて小田原城絵図類は、大外郭の外側に、寺社・
家屋等を描いておりません。例外として、指摘されるの
が「天保城絵図」で、山王口に近接して、宗福寺と本久
寺を記しております。特別な意味が込められてはいない
でしょうか。

この「天保城絵図」の旧蔵者板倉氏は、江戸詰・高百
石御先頭御取次頭御目付役兼帯でした。小田原市立図
書館特別集書『板倉家文書』の中には、忠真の書画、書
簡や忠愨(タダナオ)の書画などが多数あります。藩主
の近く、奥向きに仕える藩士だったのです。『小田原城
古絵図集』(小田原市郷土文化館研究報告 No.13)は、
「全図の構成はフリーハンドに倣し、表現も童画の趣き
があふれて全く楽しい。しかしそのように稚拙ながらき
わめて密度の高い内容を示し、城内はもろるん後北条氏
外郭まで忠実に描き込んでいます。」とその特徴を紹介して
います。私は、こうしたこの絵図の特徴から、「天保城
絵図」は、幼君忠愨に、小田原城や城下について説明す
るための城絵図ではなかったかと思えます。城絵図の作
成に当たった者は、本久寺について説明が及ぶであろう
ことを予め承知しており、あるいは予め指示されて、特
に記入したのではないでしょう。

3 再建工事

本久寺の再建工事は、第一期工事、第二期工事、そし
て第三期工事と、つごう三段階になりました。これに明
治期の火災からの復旧工事が加わります。

第一期は、日頃の掃山した天保元年から、彼の寂する
天保五年までの間。本堂と庫裏の再建が終わりました。
第二期工事は、彼の没後、成貞によって直接に法泉坊、
妙見堂と進められたようです。この期の彼女の直接指揮
の工事は、「開口」迄で、第三期が、日細による山門工
事で、山門工事は成貞の在世中に行われたと思われま
す。『新編相模風土記稿』は、天保七年に原稿がまとま
ったと言われますが、伝える本久寺の姿は、稲荷社、妙見堂、
鐘楼、子院法泉坊を記載、文化年中の罹災は旗桜につい

てのみ記載になっていきます。堂宇の天保期の再建につ
いて、特に記してありません。

この天保の初期は、いわゆる天保のききんの最中であ
り、奢侈が戒められ、節儉が求められた、天保の改革の
時代です。この時期での寺院の再建・復旧工事ですから、
寺社御条目や寺社方添書の「定」や「覚」が厳しく適用
される筈です。こうした時勢での、本久寺の再建工事で
あったことを踏まえて、考えたいと思うのです。

山門工事にあった日細(龍牛院)は、日本講寺二百
九十三世を安政三(一八五六)年八月二十九日に辞任し
て、本久寺の三十一世に着任し、明治六(一八七三)年
に寂します。安政六(一八五九)年没の成貞は、日細に
み取られ、恐らく墓碑銘の撰書も日細によるものでし
ょう。

立木望隆氏によりますと、往時渡取川にかかっていた
朱塗りの橋がきれいだったと、某古老が言っていたとい
うことですが、今日参道を行きますと、正面に山門。こ
れは普通のことですが、変っている点として、正面山門
を入りますと、奥正面に本堂と庫裏、右手に鐘楼台があ
ります。脇の山門を入りますと、奥正面は妙見堂、手前
左手に稲荷社、右手に水鉢楼があります。「成貞法尼詠
歌碑」は妙見堂の北側、墓域との境界近くの木蔭にあり
ます。子院の法泉坊がどこにあったかは、判りません。
ところで正面山門の彫刻と、脇門の彫刻を比較します
と、主門の龍に対して、脇門は小鳥があしらわれ、女性
的な優しい趣きを示しております。妙見堂の彫刻の趣き
は、主門・脇門の趣きと、必ずしも同じではありません。
明治十一年に放火により焼失し、その後の再建にさいし
て、若干違ったニュアンスになったのでしょう。

山門で、もう一つ注意をひかれることは、主門を内側
からみると、先述して来たように、十六弁の菊花紋が、
彫り込まれていることです。主門正面の懸額「六條」は、
京都の六條にあった本山「本國寺」から贈られたと伝え
られているとのことですが、勅願寺の本國寺末だからと
いうことでは、ないでしょう。菊花紋は、成貞の出自・
特に経歴に関係し、かつ、幕末の尊皇思想と日細の趣向

とが、重なっているのでしょうか。ちなみに、『箱根御
関所日記書抜中』に「天保四年正月二十九日 一御勅
額御用物 御馳走前格之通下座」とあります。本堂等の
再建時のことです。

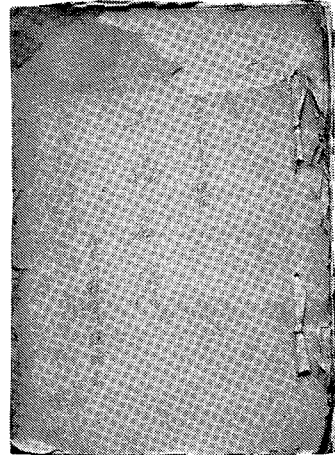
幸七名平輔姓内野氏神奈川県下足柄下郡板橋村之人也
父言幸助第三子天保二年辛卯之生也……明治十有一
年春二月法光山鎮守妙見堂燦然羅灰燼之際牟氏昏僕久
之言不釐巨万室柏如何得復昔日殿宇蹟然擅越講社團結
則不日而可得堂額壯觀耳爾來身先寸衆從事再建遂如
其言焉且天童廚子莊具亦盛乎調存皆是氏因良幹而已將
為本社資財設協心講完拏若可干幣額矣嗚呼斯時也無此
人則令不得充物其本宮矣所謂

明治十九年吉祥日法光山王三枝松日然謹書
『小田原の金石文 三』「内野氏墳墓」より抜粋

内野幸助については、紀輕人との関係において、先に
述べたところですが、同じ京都の本國寺末の妙安寺が、
板橋から二宮に移転するについて、特に尽力したのが、
「内野氏墳墓」の碑文を書いた、日然でした。本久寺で
は、その後も本堂・庫裏と復旧工事が重ねられたよう
ですが、今日では山門の趣き以外に、成貞の作事の風をし
のばせるものはありません。また、真庵というか、成貞
の庵の位置も判らなくなっています。成貞の備
えた福田も、その後の度重なる災害からの復旧・補修・
その他の事情で失なわれていったのでしょう。

中野氏は『金石文』解説で、成貞を妙見堂の「堂守」
として、紹介しておりますが、中野氏は、恐らく歪小化
された成貞尼伝承を聞き、そのまま記したのでしょう。
成貞は堂守というよりも「庵主」であり、三十世日願が
天保十一(一八四〇)年九月四日に寂してから、三十一
世日細が安政三(一八五六)年八月二十九日に着任する
までの間、庵主として「住持」されていたと見る方が適
切だと思います。そして、成貞自身寄る年波を考えて、
日本講寺から日細をよび、後継者としたのでしょう。

終戦直前後における 県西地域の工場



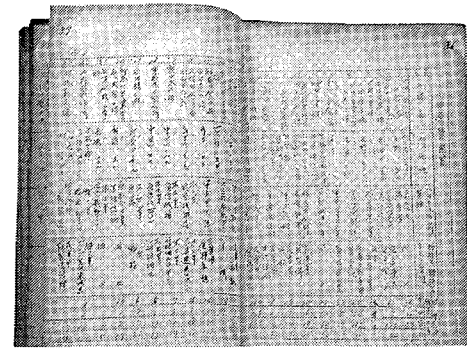
野村 信

『小田原史談』(第二三号)

には、「大詔奉戴日の日新工業(株)小田原工場」「学徒勤労労働員の記録 そして終戦迄」などが掲載され、学徒勤労労働員を体験した私にとって感慨深いものがあった。

現在私は、神奈川県立文化資料館に嘱託として勤務しているが、昭和二十年十月一日現在で神奈川県労政課が調査した『工場名簿』に、先頃接する機会を得た。その名簿は目下整理中のため未公開資料であるが、終戦直後の神奈川県下工場名が網羅されており、当時を知る貴重な資料である。そこで今回は、県西地域に限定し、その内容の一部を紹介することにした。

『工場名簿』は全一四〇頁(内県西地域分は十七頁)、葉半紙に謄写印刷され、既に四十



数年経過した今、紙は酸化変色し、印刷も不鮮明である。この調査の目的や方法についての説明はなく、各警察署ごとにまとめられている。内容項目は、一、工場名 二、所在地 三、八月十五日前ノ業種 四、轉換又ハ轉換セントスル業種 五、従業員

数(職員・工具各男女別数)について簡単に記載されている。調査時期が歴史的にも未曾有の混乱期であった故か、内容に杜撰な点も見られ、整理上無理もあったが一応統計を作成してみた。以下その統計表をもとに、少しばかりの解説を加えた。

第1表 名簿登録の工場数

小田原警察署管内		
行政区域	営業	休業
小田原市	130	2
酒匂町	10	1
湯本町	9	1
国府津町	8	
真鶴町	7	
湯河原町	7	
吉浜町	6	
下府中村	3	
宮城野村	2	
下中村	1	
下曾我村	1	
片浦村	1	
箱根町	1	
温泉村	1	
合計	187	4

松田警察署管内		
行政区域	営業	休業
山北町	7	1
松田町	6	1
南足柄町	2	2
酒田村	2	
吉田島村	1	
桜井村	1	
金田村	1	
曾我村	1	
上秦野村	1	
合計	22	4

第2表 業種別工場数

業種	警察署			計
	小田原	松田		
製材・木製品業	70(42)	6(6)		76(48)
金属工業	23(12)	4(2)		27(14)
繊維・製綿業	16(3)	5(2)		21(5)
機械器具工業	17(13)	1(1)		18(14)
電気機器工業	8(4)	2(2)		10(6)
ガス・電気配給業	9(1)			9(1)
食料品工業	7(4)	1		8(4)
製水業	7			7
化学工業(含フィルム)	3(1)	2(1)		5(2)
窯業・土石業	4			4
器製造業	4			4
光学工業	2(1)	1(1)		3(2)
紙加工業	3(2)			3(2)
造船(木造)業	3(3)			3(3)
印刷・製本業	2			2
その他(含不明)	9(1)			9(1)
合計	187(87)	22(15)		209(102)
(軍関係比率)	(46.5%)	(68.2%)		(48.8%)

町村単位ではなく警察署単位で調査されたのか、理由は不明である。工場数は小田原市が圧倒的であるが、第3表にみられるように小規模工場の占める割合が多

一、日興電気製作所(南足柄) 軍需通信部品 二、高木製作所(南足柄) 不明 三、八光軍装工業(山北) 軍服縫糸 四、東京ネズ工業(松田) 航空機部品 ネヂ・ナット (以上松田署管内) 第2表業種の分類については、独断的な処理を余儀なくされた。殊に金属工業と機械器具工業の区別に迷った。製材・木製品業が一位で、七六(三・四%)を占

第4表 職員・工員別従業員数

警察署	従業員		小計	工員		小計	計
	男	女		男	女		
小田原	845	391	1,236	3,025	1,344	4,369	5,605
松田	218	51	269	810	682	1,492	1,761
合計	1,063	442	1,505	3,835	2,026	5,861	7,366

第3表 規模別従業員数

従業員数	警察署	小田原	松田	計
1000人以上		1		1
999人～500人			1	1
499人～300人				
299人～200人		2	1	3
199人～150人		3	1	4
149人～100人		5		5
99人～50人		8	5	13
49人～40人		12	1	13
39人～30人		11	1	12
29人～20人		23	3	26
19人～10人		47	6	53
9人～5人		29	2	31
4人～1人		46	1	47
合計		187	22	209

第5表 従業員数5位までの従業員の内訳

工場名	従業員		小計	工員		小計	計
	男	女		男	女		
1 国産電機	160	109	269	699	145	844	1,113
2 富士フィルム(足)	88	2	90	420	306	726	816
3 湯浅蓄電池	65	34	99	162	11	173	272
4 富士フィルム(小)	60	7	67	123	42	165	232
5 江戸川化学	34	2	36	131	43	174	210

第6表 従業員数30位までの工場

工 場 名	業種(昭和20・8・15以前)	所 在 地	従業員
1 国産電機	航空機用マグネット	小(蓮正寺)	1,113
2 富士フィルム(足柄)	フィルム・乾板・印画紙	松(南足柄)	816
3 湯浅蓄電池	蓄電池	小(多古)	272
4 富士フィルム(小田原)	写真薬品・光学	“(井細田)	232
5 江戸川化学	過酸化水素	松(山北)	210
6 小西六写真工業	写真工業	小(堀ノ内)	170
7 湘南製作所	軍用酸素製造機	“(酒匂)	168
8 日本蚕糸工業	・軍服の糸	松(山北)	167
9 興亜工業	・再製繊維工業	小(国府津)	161
10 日加工	・ゴム加工・織布	“(久野)	148
11 立川工作所	航空機用発動機部品	“(網一色)	130
12 三和航空機製作所	・木工航空機部品	“(緑)	109
13 小田原製紙	・和紙	“(多古)	108
14 真鶴造船所	・木造船(軍)	“(真鶴)	105
15 片岡木工製作所	・航空機木製品部品	松(松田)	73
16 朝日木工	・通信機箱	小(中島)	71
17 小田原紙器製作所	・軍需用紙器	“(荻窪)	70
18 県地方木材	・軍用材	松(山北)	66
19 湘南造船所	・木造船(軍)	小(十字)	64
20 マスタ通信工業	・木製ドラム缶	“(中島)	62
21 真鶴造船所(分工場)	・木造船(軍)	“(岩)	61
22 報徳特専化学	・縮火薬原料・脱脂綿	“(荻窪)	58
23 小田原被服工業	・民需用作業衣	“(小田原)	56
24 東亜木工	・弾薬箱	松(松田)	56
25 吉田精工	電波探知器	“(”)	55
26 神奈川食品	海軍用食糧	小(国府津)	55
27 牧野織維	・エンジンカバー	松(金田)	54
28 新興社	・航空機用木製品部品	小(緑)	48
29 東和木工製作所	・木工通信機部品	“(中島)	47
30 吉田精工	・木竹製度器	“(新玉)	47

(・印……生産素材が木・繊維・紙のもの)

○人以上をみても一七(八・%)である。通常の工場統計では五人未満は集計していないが、五人未満の工場が四七(三・%)を占めている。ほとんどが中小の零細経営で生産活動が行われていた。その生産も完成品よりは、部品製造が多く、また生産性の低さは覆いがたい。

第4表では、職員・工員の比率が、職員二〇・四%、工員七九・六%である。男女比率は、職員男七〇・六%、女二九・四%、工員男六五・四%、女三四・%

第5表では、具体的に規模の大きい工場の従業員内訳を示した。国産電機・湯浅蓄電池では女子職員の占める比率が高く、富士フィルム(足)では、逆に女子職員の比率は低く、女子工員の占める割合四二%が多い。

第6表は従業員数三十位までの工場を列挙した。業種欄をみると、大部分が軍需生産に関連しており、民需生産が極度に圧縮されていたのは当然といえよう。また生産素材が木・繊維・紙に依存している工場が実に三分の二を占めている。戦争末期で金属が欠乏し、代用品生産が顕著である。戦争完遂に邁進していた当時の日本は、勝利には程遠い状況にあった。

第7表は「轉換又は轉換セントスル業種」を整理した。業種の轉換は、県西地域全体では九二(四四%)で、継続(轉換しなかった)九八(四九%)で、継

第7表 業種の変化状況

状況	警察署	小田原	松田	計
転換		77 (41.2%)	15 (68.2%)	92 (44.0%)
継続		93 (49.7%)	2 (22.7%)	98 (46.9%)
不明		17 (9.1%)	5 (9.1%)	19 (9.1%)
工場数計		187	22	209

続の方が多し。しかし松田地域では、転換が一五(六二%)を示した。このことは、第2表と関連しており、比較的軍関係工場が少なかったことによる。

以上『工場名簿』というただ一冊の資料により、県西地域の工場を紹介した。本文作成にあたり、他の資料や対比できるような統計等をさがしたが適當なものは見当らなかつた。

それにしても敗戦というみじめな現実から脱出した日本が、半世紀を待たずに今や世界の大国となり、豊かに変貌を遂げたことは正に驚異である。歴史とは魔訶不思議なものである。

以上

外人の見た小田原

『ヒューズケン日本日記』より

ハリスが江戸出府に随行したヒューズケンの日記(青木枝朗訳、岩波文庫)の抄録である。彼はハリスの通訳兼書記として幕府と日本修好通商条約の調印に当って重要な役割を果たしたが、文久元年(一八六一)一月日本人により暗殺された。二十九歳。下手人は、水戸の浪士と噂されたが、最近の研究では薩摩の武士であるとのこと。

一八五七年十一月二十六日

〔安政四年十月十日〕

……小田原に近づくにつれて、さわやかな潮風が冷たく感じられるようになった。町に入る前に警察の分遣隊が竿のさき

に提灯をつけ、アメリカ大使の一行に敬意を払うため、鉄の環をつけたものを路上に突き立てて、じゃらじゃら鳴らした。こうして護衛されながら、気持ちよい小田原の町なかを通過して、ようやくその夜の宿のきれいな家の前についた。

▲アメリカ大使一行に敬意を払うため、鉄の杖云々は、夜警に用いた金棒と思われ、小田原では、昭和三十年頃迄、冬季の「火の番」の夜廻りに使っていた地区もある▼

一八五七年十一月二十七日

〔安政四年十月十一日〕

朝八時三十分頃、藤沢に向けて出発。小田原の海のように磯浪の荒いところはほかにない。海からかなりへだたっているのに家全体が震動し続けるので、私は地震のためかと思った。

▲小田原の海のように磯浪の荒いところはほかにないとは、たまたま、熱帯性低気圧が接近してのことであろう。彼が記すような現象は、海辺近くに住む人たちにとっては、年に何回か出会う。波が浜辺に叩きつける地響きが物凄いのので、天気図を見ると、太平洋上彼方に台風が発生している。その地響きが急に止むことがあるが、台風の進路が西の九州に向うときに見られるようだ。

冬季、このように地響きが、し始めると、寒さがゆるんで、急に暖かさが増してくる▼
海鳴りを遠くに寒気緩みたり
半歩

神奈川県には千米を超えるピークを複数持っている山岳地帯が二つある。箱根と丹沢である。箱根が文化史的にも地史的にも、そして植物学的にも広く人口に膾炙されているのに比べて丹沢はもっぱら山男たちの舞台であつたように思われる。丹沢には全山域に難易各レベルの岩登り(滝の登攀)をとまなう沢歩きのコースがあつて、それを目指して集まる山男たちにとって丹

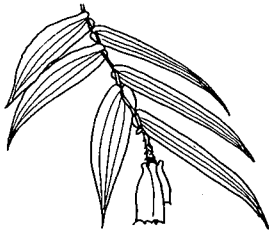
丹沢の植物

①

城川四郎

沢は沢歩きのメッカともいわれた。昭和三十年に神奈川国体の山岳部門が丹沢で開かれてから登山者は急増したものである。しかし、その頃はまだ、丹沢の名花サガミジョウウロウホトトギスは、学界にも知られぬまゝ、ひっそりとその美しい花を岩壁に垂らしていたのである。全神経を集中して滝を登るクライマーには、この美しい花が眼にはい

サガミジョウウロウホトトギス(ゆり科)
Tricyrtis ishiana Ohwi et Okuyama



(筆者原図)

眼に触れないはずはない。しかし関心がないということとは否気なもので誰もこの植物を何という名の植物か確かめようとはしなかつたのである。昭和三十一年に石井氏が採った標本が横浜国大に持ち込まれて初めて学界に知られ世に紹介されたのである。これほど優美でめだつ植物が登山者の多い丹沢で昭和三十年代まで発見されなかつたというのは植物学上稀有のことというべきであろう。正にこのサガミジョウウロウホトトギスを丹沢の植物のエースであり、神奈川県だけに産する植物として唯一のものでもある。

真鶴方面史蹟めぐり 去る七月二十七日(木)、貴船祭を中心に併せて荒井城、風外ゆかりの天神堂、鳴鶴を見学。折から台風十一号の余波で天候が心配されたが、四十五名の参加者を見、神興の海上渡御と貴船神社前の鹿島踊りを堪能。その後希望者による中川一政美術館を見学。

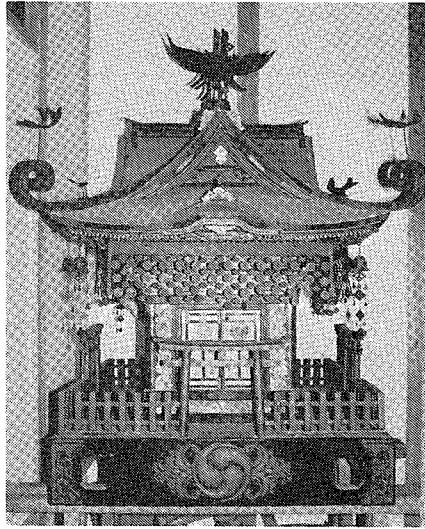
私の早川村誌(九)

紀伊神社のこと

青木友吉

この程長友木村博士が永年の研究成果の一部を纏められ『死—仏教と民俗—』と題して、名著出版社から五月二十五日第一刷が刊行された。

その中に「小田原市早川の紀伊神社の延享四年(一七四七)の神輿にも四方燕がついている」(「第五章靈魂の行方—燕の伝承」二一九頁)と記されている。本誌の前号「私の早川村誌(八)紀伊神社のこと」の神輿の挿入写真には四方燕がなく、製作者の伎倆がうかがえる程のものである、と記し燕のことには觸れ

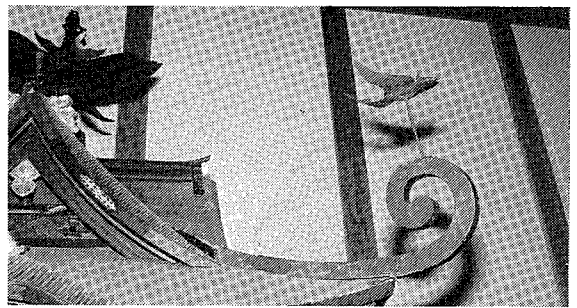


た。四方燕が「敵手」と共に取外しあった。私はホット胸を撫おろした。七十六歳の老人のボケと痛感した次第でありま

なかった。私には四方燕の意義の認識がなかったのが本当のところである。この写真は本年四月二十三日の宵宮の日に小田原史談の岡部氏の撮影である。宵宮の日に神輿の収納庫が開かれるので、是非木村氏の來觀をと約束をとりつけておったが、木村氏のようにどころない所用で御見えにならなかった。私には四方燕の記憶が全くないので、この件は全く木村氏の早とちりではないかと胸を痛めていた。

六月二十六日の木村氏の來觀を期に再調査したところ、あった。四方燕が「敵手」と共に取外しあった。私はホット胸を撫おろした。七十六歳の老人のボケと痛感した次第でありま

御輿敵手に燕

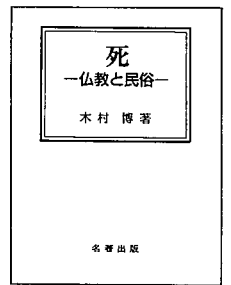


した。前誌「小田原史談」百三拾七号の神輿の寫眞を「敵手に燕」の寫眞と訂正させていた、きます。

ついでは何故に四方燕がつけられるのであるか、このことについて木村氏の「燕の伝承」から引用させていただきます。

先づ何故神輿なのか、景山春樹氏の『神道の美術』(昭和四十年)から引用させていただきます。

宮廷風俗が神社儀礼へ移入した中で、忘れることの出来ないのは神輿である。神輿は広く各神社にゆきわたって、祭礼の神



『死』 敬遠したくなるような書名であるが、そこには著者の生きざまがある。

著者は、かつて小田原史談会と縁のあった方で、会員の中には記憶されている人もいと思いが、学生時代に柳田国男にひかれ、卒業後も専攻の経済学とは全く縁のない民俗学に踏みこんで、名利を求めず四十余年に

及ぶ研鑽。その一部を本書にまとめたもので、その契機は昨年大病されたこと。

内容は、末期の水、安樂死、葬送儀礼、死後の供養、日本人の来世觀を通して、日本人の死に対する意識を民俗の側から解明しようとしたもので、小田原

地方での、幾つかの例証を挙げており、また各地の多くの事例の積み重ねだけに充実した内容となっている。東京大学大学院でテキストとして採用との事、その理由も頷ける気がする。(澄)

B6判 二八〇頁
二千八百円 名著出版刊

販いとしては民衆とは、きりはなせない深い関係をもつものとなってしまうているが、その本質は宮廷における貴族らの乗物として発達して來たものであり、屋上に鳳凰を置くものを鳳輦、蕙花と称する擬宝珠形を置くものを蕙花輦と呼んだのである。

本来は中國に起源を發するものだが、日本では奈良時代に宇佐八幡宮を東大寺へ迎えた時に、はじめて神々の乗物として用いられるはじめたと言はれているが、広く普及したのは平安時代に入ってからのこと、思ふ。

とされている。四方燕は、燕の不可思議なる

現代作家による 素晴らしい聖子易観音像に ふさわしい観音堂落慶

小台・蓮乗寺

○相模国足柄下郡成田庄小壹村飯田郷に属す。江戸より行程二十一里二十六町。家数二十四。東西五町四十六間、南北四町二十三間(東 柳新田村。西 足柄上郡岩原・塚原二村。南 郡中新屋村。北 足柄上郡 栢山村)。今大久保加賀守忠貞領す(天正十八年、大久保七郎右衛門忠世に賜り、其子相模守忠隣の時、慶長十九年収公せらる。元和六年、阿部備中守正次に賜はり、同九年、又御料となり、寛永九年稲葉丹後守正勝に賜ふ。此後の遷替は飯田岡村に同じ) 検地は萬治元年の改なり。村内に富士道係れり(幅九尺)。

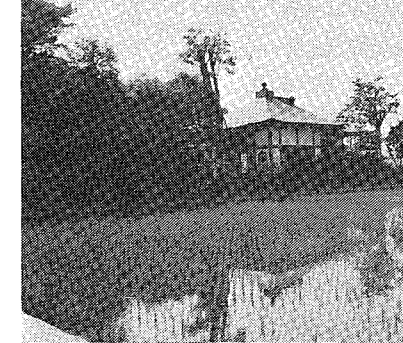
○蓮乗寺。華臺山法堂院と号す。浄土宗(足柄上郡沼田村西念寺末) 宝徳元年僧公建(良蓮社頼譽と号す。文正元年三月十三日卒)。本尊三尊弥陀(定朝作長一尺七寸八分) 当寺正徳二年の洪水に堂宇流失せしかば水災を畏れ今の地に移して再建す。旧地は墓所となせり。

〔『新編相模国風土記稿』〕
小田原市も北の外れに近く、小台一七二番地所在、室町時代中期の宝徳元年(一四四九)創立の古刹、蓮乗寺に、最近見事な観音堂が完成したと聞き、早速取材に向ってみました。



江戸時代中期の正徳二年(一七二二)再建当時のまゝという山門を潜り、住職松蔭徳誠師の案内を受け、本堂を右手に廻りますと、境内東側に真新しい観音堂(慈眼堂)が目に入ります。説明によれば、正面三間、奥行四間半。内部は松の六寸角柱に十八枚の畳を敷きつめ、樺の丸柱と虹梁にて内外を隔て、五色の幕を背景に内陣は一間半の板張り。格天井。東・南・西の三面に障子をたて、分厚い米杉の濡れ縁が囲みまます。

正面に安置された聖子易観世音菩薩像は、等身大よりはいささか大きく、台座より高さ九尺。平安時代の著名な仏師定朝の流れをくみ、大阪四天王寺大仏師・成田山新勝寺大仏師等の称号を有する京都在住の仏師松久宗琳の作とみて、樹齡三〇〇年を越す松材の一木彫り。左の御手に高く蓮華をかざして上供を奉戴し、すなりとのべた右の御手は赤子を撫し、ふくよかな、と申し上げるには多少強い顔立ちながら、見上げる角度を様様に変えて拝すれば、慈眼笑みを湛えて衆生を下化し、数多の千棘観世音小像を周囲に從えて、戦没者及び水子の供養を兼ねる、子易観世音と称えるに足る屈指の作と拝見いたしました。



青田風めぐるる堂の観世音
掬泉

詳細に伺いますと、この観音

像は昭和五十五年七月二十三日に搬入されて同日開眼供養。以降本堂に安置すると共に観音堂の建立を計画しておられたそうですが、昨年度より浄財の募金を始め、短期間にその総額は二千万円を越え、敷地は寺域東側に隣接する田の提供を受け、昭和年代最後の日となった一月七日に空組み(工事開始)。同三十日に上棟式。奇しくも昭和天皇御生誕の日の四月二十九日に完成。落慶法要を営むを得たださうです。

当日は好天に恵まれ、稚児行列も賑々しく、参集した崇拜者三〇〇余名。盛大かつ善美をつくした法要であったとのこと。

観音像を拝し終えて改めて堂内に目をやりますと、八十一枚の格天井に桐の薄板を地板として截金を貼りつけ、東より西に彩色豊かに四季折々の花樹花草が描かれています。

これは宗琳師の長女、絵仏師松久佳遊女史の、二ヶ月半にも及ぶ労作とか。昼夜を問はず絵が映えるように照明に工夫がこらしてあるそうで、内部の結構と共にそのご配慮のほど、只々感嘆するばかりでした。

尚、前立ての小観音像も同じく松久宗琳師の作。また庫裏の

(飯田 悟郎記)

兵隊ごぼれ話

黒髪神社

夜の点呼の節私は、明日の警戒兵勤務は黒髪神社前だと命令された。男世帯の兵営では黒髪神社と云う名前そのものに、ロマンチックを通り越した艶めかしさを感じられた。

点呼解散後某二年兵氏曰く、「西山、お前明日は黒髪神社前だそうだな。あそこは氣をつけるよ」と。私は「ハハア、これはその近くの民家に娘さんが居て兵隊の処へ遊びに来るのかな。」

さもなれば白粉をつけた女の居る一杯呑み屋でもあるかな」と思った。然し私は恍惚した。「それは黒髪神社の祭神様がお姿を現はしてお出ましになるのですか」と真面目な顔で云った。

だが明朝早く弁当を持ち、多少(かなり)の期待を胸に秘めつつも、初年兵らしいつましさを忘れずに現地へ着いた。期待は全く裏切られて、目のとゞく限り一杯呑み屋は勿論、若い美しい娘さんが居るかも知れぬ民家等一軒もなかった。朝早く弁当持参で山林への仕事に行くひげもじゃの小父さんが、二人通っただけだった(西山銈太郎)

小田原保勝会のこと

小田原保勝会は、明治三十年後半から大正、昭和の初頭にかけて小田原の発展に寄与した純然たる民間団体で、機関誌として『小田原の史実と伝説』を大正九年(一九二〇)に創刊、大正十二年の関東大地震により休刊の止むなきに至ったが、その間、第十集まで発行している。郷土史を知るうえで貴重なものとなっている。次は創刊号の巻頭に載るのを再録したものである。

發刊の趣旨

史実伝説は郷土の華である。是を空しく煙滅せしめざらん爲め、我が小田原に関する古文書又は古老の談話に基

き、是を一小冊子に蒐録して汎く同好の士に頒たんとするもの、即ち本誌發刊の目的である。

小田原保勝會

<p>▼小田原御井邸(小田原城址) ▼御幸の濱(小田原御井邸) ▼小宮徳徳を祀る報徳二宮神社 ▼元弘の忠臣中津川成朝の墓(新久・瀬井寺) ▼北條氏政門氏照生菩提地(上幸田・永久寺) ▼北條氏政門氏照生菩提地(谷津・新久寺) ▼小田原佐村(小田原城址) ▼小田原佐村の門前(小田原城址) ▼小田原佐村の九十九歳の蓮花 ▼小田原佐村の九十九歳の蓮花</p>	<p>▼梅干▼蒲鉾 ▼いかのしほから ▼マかつをのたゝき ▼甘藷梅▼菓子蒲鉾 ▼さし梅▼梅シヤム ▼梅羊羹▼報徳煎餅 ▼梅もち▼さなだ餅 ▼ういらう(蓮花餅) ▼小田原小判(菓子)</p>
--	--

郷土関係の刊行物

平成元年1月～6月

小田原図書館並びに 市内3書店調査

- ◇小田原市史 史料編近世Ⅱ 藩領1 小田原市刊 A5版 742P ¥5,000
- ◇南足柄市史1 資料編 自然原始 古代中世 南足柄市刊 A5版 834P ¥4,500
- ◇市史研究あしから 創刊号 南足柄市史編纂委刊A5 69P
- ◇おだわらの町名・地名 小田原市教委刊 B5 66P
- ◇小田原文化ガイド 小田原市教委刊 B5 124P ¥800
- ◇小田原の文化財 小田原市教委刊 A5 133P ¥1,000
- ◇足柄史談 No27 足柄史談会 A5 148P
- ◇小田原市郷土文化館研究報告 No25 B5 95P ¥950
- ◇真鶴 No28 真鶴を知る郷土の会刊 B5 61P
- ◇創立五十周年記念誌 相洋中・高等学校 A5 367P
- ◇四十周年記念誌 小田原城内高等学校定時制 A5 109P
- ◇関東大地震体験記録集 山王網一色地区公民館・自治会 B5 47P
- ◇鉄輪とどろき一世紀 山北駅百周年記念委員会編・刊 A4 42P ¥2,000
- ◇中井点描 中井町広報委員会 B5 102P ¥2,000
- ◇箱根駅伝70年史 関東学生陸上競技連盟編 陸上競技社刊 B5 616P ¥5,000
- ◇足柄城 小田原城郭研究会・静岡県東部民俗会編 静岡県小山町教委刊 B5 250P ¥2,000
- ◇小田原文芸案内 小田原文芸愛好会編・刊 新書版 187P ¥950
- ◇足柄ものかたり 生沼清治著 A5 294P ¥2,000
- ◇下府中の光芒(教育実践記録) 藤川孝男編 B6 192P
- ◇天心を求めて一歩んだ教育の道 久保敏雄 B5 101P
- ◇箱根の石仏(箱根叢書) 沢地弘著 神奈川新聞社刊 新書版 212P ¥950
- ◇身辺愛語 中河与一書 吉川書房刊 新書版 240P ¥1,300
- ◇ちぐあん随筆 そろばんのむだ玉 間中喜雄著 医道の日本社刊 B6 291P ¥1,500
- ◇夢枕漢 光の博物誌 夢枕漢著 小学館刊 AB版 96P ¥1,800
- ◇兎月人デッサン集 兎月人画 A4 119P ¥1,800
- ◇短編春秋 創刊11号 神奈川短編小説の会 ぼろーる社刊 B6 179P ¥1,200
- ◇気をめぐる冒険-実践・気の医学 勝田正泰著 柏樹社刊 B6 269P ¥1,600
- ◇花か好き人か好き 加藤あき著 244P ¥1,450
- ◇遙かなる戦陣 小峯一郎著 A5 394P

関東武士団発生の地を探る 上州路への旅

十一月二十六日(日)・二十七日(月)に!

十一月二十六日(日)・二十七日(月) 兼の創建ともいう。日本最古の(用)一泊二日の上州路歴史探訪の見どころを、紹介申しあげます。どうぞご家族と共にご参加下さい。

1 館林市

群馬県東端の都市、利根川と渡良瀬川にはさまれた、池沼が点在する景勝地、戦国時代は赤井氏が城を築き、徳川時代に將軍綱吉が城主になったことがある。

2 館林城

明治七年に焼失したが、現在の三の丸に土堀が残っている。土橋門が復元された。

3 茂林寺

分福茶釜の話のお寺。狸の像八百八狸あり。

4 鑢阿寺

鎌倉時代の豪族の武家屋敷(平城)。足利氏二代目の義兼が建久七年(二二六)邸内に持佛堂を建て、三代目義氏が天福二年(三三三)堂塔伽藍を建立した。足利氏の氏寺で、重要文化財が多い。

5 足利学校

平安初期(二四〇年頃)小野篁の創設という。また足利二代義

兼の創建ともいう。日本最古の総合大学で、戦国時代末期(四〇年前)に隆盛を極む。かつては土墨や漆にかまわれていた。

6 太田市

大平記の里。かつて新田荘として開け、新田義重を始祖とする新田一族によって支配された土地で、義重八代の後裔が義貞である。戦時中はゼロ戦の中島飛行機工場の所在地。

7 金山城

金山全山が城で北條氏の出城であった。山頂奥に新田神社がある。

8 大光院

「子育て吞龍さま」新田義重を弔うために建てた、家康が始祖。開山は吞龍上人である。

9 天神山古墳

関東甲信越で最大、二一〇米の前方後円墳、二重の塚をめぐらしている。

10 円福寺・茶臼山古墳・台源氏館跡

市の西部別所の茶臼山古墳の前方部東端に円福寺があり新田氏の累代の墓と伝える石塔群がある。円福寺の開基は新田政義である。ここが義貞誕生地の地である。ここが義貞誕生地の地である。

ある。

11 反町館跡

義貞が成人後居住していた館の跡三重の畷濠であったが、現在には本丸跡に面影をのこす平城。瑠璃山時照寺の寺地。

12 生品神社

新田義貞率兵の地(元弘三年鎌倉攻めで幕府滅亡)

13 東照宮

日光東照宮の建物の一部を移し家康ゆかりの品を残す。天海の建立。尾島町徳川は徳川発祥の地である。

14 長楽寺

隣(同一敷地内)に義重の四男義季(徳川の始祖)開基の長楽寺がある。重要文化財を収納している。

15 多胡碑(吉井町)

日本三大古碑の一つ。『弁官府上野国片岡郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣在中弁正五位下多治比真人大政官二品穂積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊』この碑文は『続日本紀』元明天皇和銅四年三月の条と相応している。この地は東海道が未発達の前代に、東山道の関東平野の出口として大和朝廷の東方経営の一環を成す重要地域であった。

16 貫前神社

寛永十二年(一六三三)家光の再建、上州一の宮文化財多し。

17 旧七日市藩邸跡

七日市藩一万五千石の城下町が富岡市である。

18 旧富岡製糸場

明治五年設立。現在片倉工業(株)富岡工場。日本の近代国家への礎石として明治政府が総力あげて創設した日本最初の工場化された産業施設で歴史的建造

会員消息

◎企画事業部長和田登氏遙かエジプト・ギリシアに遊び、その吟行句を寄せられる。

・悠久のナイルの流れ今日の月かげるえる五千年のピラミッド

・月芽えてホテルの窓のピラミッド

・春陰やチャドル女の無表情

・夏の霧ナイル岸辺にロバの老人

・オアシスの涼しき木蔭鳩料理

・盗掘の石棺冷たく割れており汗ぬぐい古代アポロの丘に立つ

・白壁の古代の島や夏の空

19 妙義山

奇石・怪石の奇勝の山、上毛三山の一つ。妙義山神社は江戸中期の建立である。(和田 登記)

年来、その壺に関心を寄せて来た青木友吉氏のお骨折りによるもの。そしてこの度、青木氏は写真家澤村吉光氏の撮影による紀伊神社の宝物等の写真集を刊行。その中に横三七五cm、縦九四

五五厚さ三三cmの櫓の一枚板の豪華な、明治十二年の奉納額が含まれている。早川から真鶴までの景観を細密に描いたもので、漁撈史、風俗史からいって貴重なもの。今後説明を待たなければならぬ点もある。但し発行部数は残念ながら二十部限定。

小さな郷土誌でも

私たちの

大きな財産

『小田原』史談は

郷土史の宝庫!

落穂集

◎野村信氏の「終戦前後における県西地域の工場」の稿を手にしたとき、ちよっぴり興奮をしました。各工場では敗戦と共に書類を焼き、また、敗戦後は虚脱状態で、資料がほとんど見当らないからです。少ないデータから、いろいろと分析頂き有難うございました。

◎拾い読みで小田原生れとあるので、求めたのが岩波新書の『私の昭和映画史』。著者広澤栄氏は、大正十三年(一九二四)小田原町幸二丁目(五九番)小田原町幸二丁目(五九番)のカーブに面した茶房「十五夜」である、といつたほうが年輩の人達には分りがよい。

全編二四七ページのうち七〇ページ迄は、生いたちの記を小田原を背景にして、あと二七ページのうちに小田原の人や地名が登場、全編を通じて映画をからませているのは勿論だが、常に時代の流れを織り成しその雰囲気や伝えているのは、流石である。筆者は、豊田四郎、成瀬巳喜男の助監督を勤め、その後シナリオライターとして活躍後、東宝に入社、黒沢明、奈川工業高校(現神奈川県立神奈川工業学校)の奈川工業高校)図案科を卒業、東宝に入社、黒沢明、豊田四郎、成瀬巳喜男の助監督を勤め、その後シナリオライターとして活躍

躍してきた人。◎小台蓮葉院の仏像拜見を九月十七日(日)に実施。企画事業部で細部計画。◎七月末の夜八時頃の事、小田急相山駅の電車を待つと、一匹の燕が蛍光灯の光によってくる虫を捕えるためか、右に左にせわしく飛び回る姿を見た。日

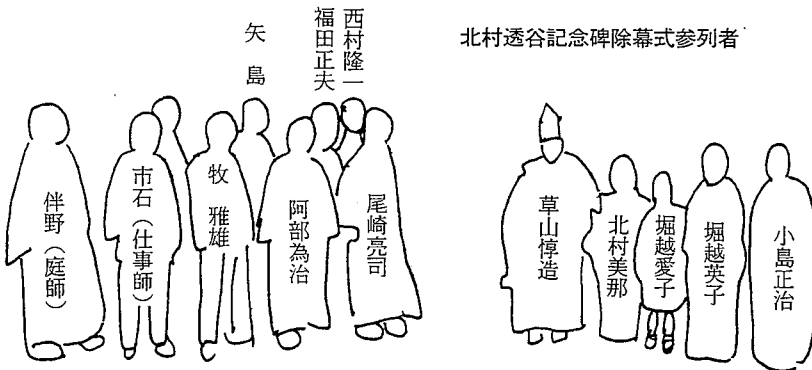
の出と共に飛び出し、日没と共に巣に戻るのが燕の習性と思っていたが、燕の世に... ◎『紅蓮洞坂本易徳』は紙面の都合で次号に回すことになりました。(陶生)

特別賛助会員

- 智恵袋 相田酒造店
- 小田原銀座 アオキ画廊
- 足柄香粧株式会社
- 飛鳥屋
- 紳士服のアメリカヤ
- 画材 ガクブチ
- 伊勢治書店
- かまぼこ
- 株式会社 江島
- 株式会社 小田原魚市場
- 小田原ガス
- 小田原信用金庫
- 小田原報徳自動車
- 株式会社 オートセンター・スギヤマ
- 共 小田原中央青果株式会社
- かまぼこ 籠
- 令 学 苑
- 鐘紡株式会社小田原工場
- カネボウ化粧品鴨宮工場
- かみやま小児科クリニック
- 興電社
- 清水甘納豆

- 正栄堂
- 廣太まぼこ
- 辰寿堂スポーツ
- 大営不動産
- 割烹 海宮
- 茶半家具株式会社
- ちんろう本店
- 角田ガクブチ店
- 株式会社 東華軒
- 八小堂書
- 八子書
- 平井書
- 富士写真フィルム株式会社
- 小田原工場
- 報徳屋
- 松坂丸ク
- 学生専科
- 食器の店 マルサンストア
- 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
- ヤオマサ株式会社
- 山口菓子舗
- 湯浅電池株式会社
- 小田原工場

北村透谷記念碑除幕式参列者



小田原市浜町三丁目十二番所見